

晩秋の大和路より

亀山郁夫

先日わがロシア学科の岡林先生宅にお邪魔して格別に美味しい地酒を振舞って頂いた時のことである。アメリカ西海岸のモンタレーという町から帰ったばかりの先生の土産話をサカナに、秋の夜長、杯を重ねながら戸外にふと目をやると、三輪山上の雲の切れ目から美しく冴え渡った満月が顔を覗かせている。家の庭先には、奈良で最も格調高い古墳のひとつと言われている崇神天皇陵が殆ど軒先にまで迫っている。大学の紀要に載せる論文を苦心惨胆して書き上げた直後でもあったせいか、遠きいにしえを偲ぶといった洒落た風情に、僕はまさに感無量の思いであった。

天理に来て早二年半、最初の一年は勝手に分らずに失敗も多く、途方に暮れた日もあったが、今ではもうすっかり馴れて、都会では得られなかった集中力も少しずつ湧いてきた。ただ、天理で生活していて常々残念に思うことは、色々な意味で外からの刺激が極端に乏しいということである。以前、大阪は非文化都市か、といった議論が新聞紙上を賑わせたことがあるが、関西人の心には概して東京コンプレックスなるものがやはり根強く存在しているように見受けられる。そしてそれは僕の場合も全く同様なのである。刺激を内側から生み出さねばならない、何らかの確たる価値規範を築き上げておかねばならない……そんな強迫観念めいたものが自分の心の底に絶えずわだかまっている。

そこで先づは不足分の「文化」をレコード漁りで埋め合わせているのが現状だ。今やクラシック界あげてのマーラー・ブームと言われているが、僕もその熱烈なファンのひとりである。現に今も、彼のシンフォニーに耳を傾けつつこの筆をとっている（尤も、これまた「東京コンプレックス」のひとつの表われであるのかもしれない）。マーラーの音楽はともかく規模が大きい。シンフォニーのレコードは殆どが二枚組であり、おいそれと新盤を買うわけにもいかず、廉価盤で我慢している。しかしいずれはテンシュテット、レヴァインといった新しいマーラー解釈者のレコードを買って心ゆくまで楽しんでみたい。

さて、それでは現在僕の勤務している天理大学について簡単に紹介することにしよう。

僕の住んでいる天理の町は、京都から近鉄で南へ約一時間、大和平野のほぼ中心部からやや東よりに位置している。あたりは古代の面影を伝える寺社、仏閣、古墳が数多く点在し、日本史に関心を持つ者にとってはまさに垂涎の地と言えるだろう。天理大学は学生総数二千三百余名の小じんまりとした三学部からなる大学で、外国語学部は全部で八学科、うちロシア学科には四学年合わせて約百三十名の学生が在席している。専任の先生の数は、毎年、ソ連の高等教育省から派遣されてくる二人の外国人教師を含めて計八名、現在、外国語学部長の重責におられる大谷深教授が学科の長を兼任されている。

一年次生の専門の授業は、大谷先生編集による本学科独自のロシア語教科書に基づいて、L・L三コマ（小島先生）、文法三コマ（大谷先生）、会話二コマ（チェボタリョーフ、クルリャンスカヤ両外人先生）の計八コマからなり、二年次に入るとL・L、文法ともに一コマずつ減って、代わりに講読の授業が三コマ増えるが、全体として授業のシステムは一年次生とほぼ同様であり、読み、書き、話すという三つの基礎学力の総合的な向上が強く意図されている。

三年次に進んだ学生は、語学（河合、小島）、文学（大谷、岡林）、歴史・文化（阪本、亀山）の三コースに分れ、各自、指導教官の指導を受けることになる。僕の担当している文化コースでは現在三年生が十二名、四年生が八名学んでいる。四年生の卒論のテーマを一部紹介しておくと、スラブ神話、イワン・クパーラの祭り、分離派の運動、日露戦争、社会主義リアリズム、ソ連におけるユダヤ

人問題といった具合にかなり多岐に分れている。卒直に言って、現在の僕の力では、それぞれのテーマについて十分な指導が行き届いているとは言い難く、学生とともに学ぶつもりで、週に二度の個別指導を行っている。一方、三年生のゼミでは「ロシアの世紀末を考える」という総合テーマのもとに十二名のゼミ学生全員に、十九世紀末から二〇世紀初頭の文化状況に卒論テーマをしぼらせ、科学、教育、文学、演劇、美術、音楽の六つの分野に二人ずつ振り分けている。この方法が成功するかどうかは、来年の卒論の出来を見なくては分らない。

他に僕の担当している科目は、二年生の講読、三年生のロシア文化概説、四年生の作文、L・Lである。特に四年生のL・Lでは、ドストエフスキーの生涯と作品に関する種々の参考書を合成して、ロシア人教師吹き込みによる音声教材を作成し、ポーズ・リーディング、シンクロ・リーディング、ドリルという三段階の反復練習を通して、テキスト内容の正確な把握をめざしている。L・L授業の進め方については現在種々の方法論が唱えられているようだが、僕自身もより有効な方法を求めて頭を痛めている際中である。

さて、最後に僕自身の最近の研究動向について少しばかりふれてみたい。

冷夏といわれた今年の夏は、東北の農村の人々に対しては誠に申し訳ない話であるけれども、アパートの四階に住む僕にとっては勉強にうってつけの夏のはずであった。だが実際は、五月に死んだ父の初盆とあって雑事にまぎれ、夏休みの終わりには憧れの土地、中央アジアに旅行したこともあって、「フレーブニコフとニーチェ(2)」は頓坐した形になった。ともあれ僕が現在、最大の関心を抱いているテーマはロシアに於けるニーチェ受容の歴史である。この問題は少し腰を据えて考えていきたいと思っている。また、この文章の初めの所で少しふれたが、九月に十日ほど集中して、大学の紀要に『フレーブニコフとエクスタシー』という論文を書いた。雑誌を読んでいるうちに浮んで来た構想をもとに、多少エクスタティックに書き上げてしまったきらいがあり（締切りが切迫していた事情もあって）、今となってかなりの不安が残る。僕の意図は、エクスタシーと詩的言語のつながりを明らかにすることによって、現代のシャーマンとしての詩人像を描き出すことだった。

もっとも、ここから派生した問題が僕には非常に有益だった。先づ、フレーブニコフと十七世紀バロックとのつながりが発見され（とりわけ「書物としての世界」という観念の共通性）、また彼の詩的実験の多くが、マラルメのそれに共通していることがヒントとして得られた。そのようなわけで今は、シメオン・ポロツキー等のロシア・バロック詩人とマラルメの『英語の単語』などを少しずつ勉強中である。フレーブニコフ大陸探険は今しばらく続くことになるだろう。

1980年 秋